

向学館通信

2006・10・28

努力が出来ない子を、前向きにしたい。

勉強する動機がまったくわからないで、努力が出来ない子がいます。

ご家庭でも、社会情勢を話したり、将来のことを考えたりする時間を取っていただければ、と思います。そのための話の素材として以下の文を書きました。

進路を考える参考にしてください。

子どもたちの進路を考えるに当たって一番気になることは、大学を出ても正社員になれる割合が少なくなったということです。

以前は「いい大学に入る」ことが目標で、そこへ入りさえすれば、あとは何とでもなるという安心感がありました。だからこそ「いい大学」がイコール「いい就職」であり、「確実な将来」でもあったわけです。しかし、いまは、国公立の理系、医学部、看護学部、など、限られた範囲の大学や学部しか「確実な就職」が見込めないというのが、真相になりつつあります。

ここ数年は、いわゆる団塊の世代の大量退職を補填するための新規採用が増えているようですが、これとて、傾向として続くかどうかは不明です。団塊の世代が引退したあとが埋まってしまえば、またしばらく就職難の時期が来るという予測もあります。

企業がフリーター、パート、派遣社員などの雇用をどんどん増やし、正社員の雇用を減らして経費削減を進める傾向は、グローバル化が進むかぎり続くと思われまふ。社会階層の「二極化」が進みます。この中で、下層にならないでほしいと切に思います。そのために、進路指導がきわめて大きな意味を持ってきていると思います。そして、こうした指導をつうじて、子供たちが自分の将来を考えたり、自分の性格や能力や好き嫌いなど、将来の自分の活動領域をはっきり意識しながら自分を見つめることの重要性を自覚していくことが必要です。

ところが、高校では（とくに公立高校では）進路指導がきちんとなされていないところかなりあるように見受けられます。そのため、生徒は、相変わらずのほほんとして、勉強に力を入れるでもなくその日暮らしをしていて、「国公立大学を受けたい」などと言いだすようなことがよくあります。とても受かりそうにない大学を志望校としているのは、自分をごまかしているのか、世間知らずであるのか、どちらかです。その両方かもしれません。こうした認識をそのまま放置すると、高3の土壇場になって行き場がなくなるような事態になりかねません。

公立高校のI類に多い、このような「のんきなその日暮らし」タイプは、おそらく学校の友達も皆同様なのかもしれません。「赤信号みんなで渡ればこわくない」といった心境かもしれませんが、これは間違っています。少子化のために今では、欲を言わなければ誰でも、どこかの大学に入れるということを知っています。だから、大学へは「努力しないでも行ける」という気持ちになっているものと思います。いま、中・高生に言わなければならないのは、「大学をどうするのか」ということではなく、将来の生きかた、あるいは職業をどうするのか、という問いです。

大学へは入りやすくなった、レベルを気にしないならどこかへ入れる・・・こうした安易な気持ちだが、先で何倍もの苦勞を背負い込ませるかもしれないのです。だが、こうした親御さんの心配も、なかなか聞き入れてもらえないことが多いようです。

進路に関して、ご希望があれば、私どもも積極的に助言しますので、お気軽に相談してください。塾の立場から、生徒に言うべきことは、言わなければならないと思っています。それが、その子の将来のために必要だと思ひます。

私立中学・高校の塾対象の説明会がほぼ終わりました

私立は少子化のなかで、経営難におちいるところもあり得ます。そうした危機意識がどの学校にも浸透して、生「生き残り」をかけた懸命の努力を続けておられるように見受けられました。こうした点でも、公立高校などとはまったく違ひます。一人も落ちこぼれを出さず、一人でも多くの生徒をいい大学に入れるという姿勢がひしひしと伝わってきました。生徒に対する面倒見のよさは、公立校にはない、利点です。

また、今年も、昨年にもまして、どこもかなりの数の「特待生」を受け入れるということを発表しました。成績のいい生徒は、特待生をねらうのも有利な進路選択だと思ひました。